

ロ 北海道の草地

畜試草地部

嶋村 匡俊

このたびの見学旅行は、私にとっては誠に意義深いものがあつた。というのは——草地の研究に従事して十年近い歳月が流れたのに——草地の北海道は、私にとって処女地だつたのである。だから、見学旅行だけで道の草地の感想を述べるだけのものを持ちえなかつた、(といつたら叱られるだらうか) 実は、バスの中で、草の上で、考えていたことは、道の草地そのものではなくて、それと比較しての、われわれの周囲の草地、そしてその研究についてであつた——あるいは、大方の人々がそうであつたのかもしれないが——。

考えていたことの二つ三つ。

われわれは、といつては失礼かもしれない。少なくとも私は、「場所」という因子が、「母数模型」であることを承知している。承知はしているのだが、「変量模型」とみなしてしまつて、ありそうもない、または、きわめて特殊な条件下での結論を導き出していることが、しばしばあるのではないか。

——草地造成予定地にいつしか宅地分譲の看板が立ち、知事が記念に手播きした開拓地が別荘用に売られていくばかりでなく、やつと軌道にのつた構造改善事業の水田酪農パイロット地区の下真中を高速道路が貫通する……といつたわれわれの周囲であつてみれば、まこと、「場所」は変な模型であることを認めてほしいのだが——

北海道の草地研究においては、「場所」は明確に「変量模型」としての位置づけがなされ、しかも、その環境条件の調査、推定は、草地研究を推進するのに十分であるように思えた。

——これは、私のひとりよがりであつて、案内嬢らしくない案内嬢の親切な話と、案内嬢がメモをとつていたほどの早川さんの説明の上手さに、私が錯覚の上で得た印象だつたのだらうか。早川さんのお話から、北海道開拓の苦勞のほどが窺がわれた。この苦勞は、われわれが、そして、われわれの近くの農家が、いま持つている憎みとは全く異質のものであるように思う。けれども、瓔珞みがく石狩の源の原始の森から、上川の稲の穂波へ目が移つた時に、われわれの近くの農家が現在持つている憎みと同質のものが、この地方にも、ものすごい勢いで押し寄せそうな感じがして、身ぶるいした。

しかし、これは、私の単なる危懼でしかあるまい。

開道百年——という。一步一步踏み固めて進んできた開拓の歴史の上に、更にまた開発を必要とする——という。内地では、開発の名のもとに、自然の破壊が行なわれている。(渡り鳥の激減を新聞は報じている)。願わくば、ハマナスあかき磯辺にも、スズラン薫る谷間にも、渡り鳥と牛との調和が美事であらん事を、

(雑な感想文ですが、意を汲んでいただければ幸いです。)